

令和 8 年度 長野県総合教育会議

日 時：令和 8 年 9 月 14 日（月）

10 時 30 分～12 時 07 分

場 所：県庁 3 階 特別会議室

1 開 会

（小池県民文化部長）

それでは、ただいまから「令和 8 年度長野県総合教育会議」を開会いたします。私は本日の会議の進行を務めます、県民文化部長の小池広益と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議は「AI 時代に求められる資質・能力を育むための学びのあり方について」を議題として開催いたします。ゲストスピーカーとして、Google for Education 営業統括本部長の杉浦剛様に御参加いただいております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず、杉浦様の講演及び質疑応答を非公開にすることについてお諮りいたします。非公開とする理由として 2 つ考えてございます。AI 分野は技術革新の変化が極めて速い分野でございます。企業の取組や見解を公開の場で発言することは、企業間の競争環境に影響を及ぼす可能性があることが 1 つでございます。2 点目は講演や質疑を公開可能な情報のみ制約することは、この会議における十分な情報共有や実質的な議論を損なうおそれがあることでございます。以上 2 点の理由により、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 1 条の 4 第 6 項の規定により、講演及び質疑応答を非公開としたいと思いますが、これに御異議ありませんでしょうか。

< 「異議なし」の声 >

（小池県民文化部長）

それでは、杉浦様の講演及び質疑応答については非公開といたします。

なお、主催者の挨拶は後ほど会議を公開にて行うときに実施いたしますので、御承知おきください。

2 外部有識者からの講演及び質疑応答

< 以下、非公開 >

3 挨拶

（小池県民文化部長）

ここから先は公開の会議となります。今の杉浦様の講演、質疑内容は非公開を前提とし

ておりますので、その内容につきまして具体的に言及することは意見交換では控えていただきますようお願いいたします。

それではここからは公開で会議を進めます。初めに主催者である阿部知事から挨拶を申し上げます。お願いいたします。

(阿部知事)

改めまして、皆さん、こんにちは、長野県総合教育会議を開催いたしましたところ、教育委員の皆様にはお集まりいただきましてありがとうございます。

まず私からは、先の知事選挙で、改めて県民の皆様からの付託をいただいて継続して知事の仕事を担わせていただくことになりました。教育委員の皆様には、これまでもいろいろな形で御支援、御協力いただいておりますが、これから未来に向けて、子どもたちの未来のために、そして信州をこれからつくっていく子どもたちのために、ぜひ御尽力いただきたいと思えますし、また、我々知事部局と教育委員会との連携が極めて重要だと思いますので、引き続きの御支援、御協力をいただきますようお願いを申し上げたいと思えます。

今回私の公約は、7つの未来ということ掲げておりますけれども、一番最初に学びを書かせていただきました。一人ひとり伸ばす学びの改革、そして県立高校の再構築と特色化、あるいは学校のガバナンス改革、これは私が候補者として打ち出した公約ではありますが、いずれも教育委員会との連携、そして教育委員の皆様への御理解、御協力が不可欠でございます。

そういう観点で、「信州未来・100 日アクション」というものを出させていただきました。当面私がまず先に着手していくものとして、これからの信州教育の基本的な考え方を教育委員会と協働して取りまとめますということを出しております。これは教育の分野については、私だけがこうしたいということで進められないので、ぜひ、この総合教育会議の場等を通じて、皆さんと意思疎通をしながら、ぜひ同じ方向感、同じ問題意識を共有しながら取り組んでいきたいと、そういう思いからでございます。

信州学び円卓会議の御意見等も踏まえながら、12 月中にこの基本的な考え方を取りまとめたいと思っておりますので、ぜひ教育委員会委員の皆様には、御協力をいただければと思っております。

本日のテーマは「AI 時代の学び」ということで、非常にこれからの教育、学び全般に関わる話です。ぜひ率直な意見交換をさせていただく中で、方向感を共有していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私からは以上です。

(小池県民文化部長)

続きまして、武田教育長から御挨拶をお願いいたします。

(武田教育長)

皆さん、こんにちは。今日は第1回の長野県総合教育会議ということでありがとうございます。

今、教育の世界が大きく変わりつつあるわけですが、その中の一つの要因として、この

AI の急激な発展というか、急激な変化、活用というのがあると思います。それは、今までの明治以来ほとんど変わらなかった伝統的な学習観が、ここで変化してくるのだろうと思います。一つには知識の量を学力として捉えていたことや、正解にたどり着く正確さを重視していたことや、あるいは分析的に思考したりすること、そういったことはこれからかなりの部分が AI に代わっていくのではないかと。そうすると、これから学びというのがどういうことか、学びとは何かということが問われていく時代になるんだろうと思います。

既に学校にある課題が学校の中だけで解決できないというのはあれですが、教育委員会が抱えている課題も教育委員会だけでどうこうという話ではなくて、知事部局やいろいろなところの御協力や、同じ方向を向いて進んでいくことが、長野県の教育をより発展させることになるのではないかと思います。

そういった意味で、今日のこの議題についても、知事としっかり腹を割って話ができたらありがたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

4 会議事項

(1) 県内学校の AI 利活用の状況について

(2) 意見交換

(小池県民文化部長)

それでは、会議事項に入ります。本日の議題は先ほどから御発言ありましたが、「AI 時代に求められる資質・能力を育むための学びのあり方について」でございます。

最初に教育委員会から、県内学校の AI 利活用の状況について、御説明をお願いいたします。

(田中学びの改革支援課長)

よろしくお願いいたします。教育委員会事務局学びの改革支援課課長の田中篤と申します。よろしくお願いいたします。着座にて失礼します。

それでは私からは、長野県内の学校における生成 AI の活用状況について御説明いたします。

まず、県教育委員会としましては、学校における生成 AI の利活用を、これまでの学びや教育活動をより充実させるために活用するものと捉えています。児童生徒にとっては、生成 AI を、思考を深めるための壁打ち相手として活用することが考えられます。また、教職員にとっては、業務のたたき台をつくる優秀な助手として活用することができると考えます。

ただし、どちらの場合も、最終的な判断や価値を生み出すことは必ず人間が行う、このことを基本にしたいと考えています。

資料 2 枚目です。

現在、長野県内の学校では、生成 AI の活用は、まず、校務での利用を入口として広がってきております。長野県内の小・中学校を対象とした令和 8 年度学校経営概要調査では、生成 AI を教員が校務で活用している学校は、小学校で 96.2%、中学校で 95.0%に達しています。また、教員が授業で活用している学校も、小学校で 62.6%、中学校で 68.7%となっています。一方、児童生徒が授業で生成 AI を利用している学校は、小学校 7%、中学校 26.3%です。口頭での報告になりますが、県立高校においても、93.5%の学校で生成 AI に係る研修が実施されております。

これら数字からも、教員による生成 AI の活用は広く浸透してきている一方で、これからは、児童生徒自身の学びに生成 AI をどのように安全につなぎ、学びをより充実させていくか焦点になると考えています。

実際の活用例についてです。

教員の校務では学級通信やお便りのたたき台づくり、アンケートの集計・分析、研修や講演会の要約などに活用されています。授業や学習では、例えば、英会話の練習相手、プログラミングの補助、数学の練習問題づくり、英語の例文作成、授業で提示するスライドの作成など、様々な実践が始まっています。県立高校においては、さらに面接練習の質問例の作成や、海外の学校との交流のためのメールの翻訳などを挙げられています。

児童生徒の活用例としては、児童生徒自身が足りない視点や考えを補ったり、例えば、自作の短歌を AI との対話によって推敲したり、生徒会企画のアイディアを出したり、文章構成について相談したりするなど、考えるための相手として生成 AI を使う実践も見られています。

しかし、生成 AI には注意すべき側面もあると認識しております。

生成 AI 利用活用のワーキンググループに参加しているある教員からは、便利な道具である一方、使い方を誤ると生徒の思考停止や依存を生む可能性があるという声も上がっています。生成 AI を単に答えを教えてくれる便利な道具として使うのではなく、問い返しをさせたり、自分の考えを可視化したり、振り返りを支援したりする道具として活用することが重要だと考えております。

今後、子どもたちは社会の中で生成 AI と必ず付き合っていくことになります。AI を使わせることを目的とするのではなく、AI を使うことで子どもの学びがどう変わるのか、問い続ける必要があると考えております。

そして、ここで忘れてはならないと考えているのが長野県の学びの強みです。長野県が大事にしてきた直接体験を通して、五感を使いながら地域に根ざした学びを大切にしていくことはこれからも変わらないと考えます。生成 AI はリアルな学びを代替するものではなく、リアルな学びをさらに充実させるものと考えております。県教育委員会としましては、教職員の働き方改革と児童生徒の深い学び、その両方を実現するために生成 AI を適切に位置づけ、長野県らしい学びと組み合わせながら、その可能性を探っていきたいと考えております。

以上で説明を終わります。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

それでは、ここから意見交換の時間としたいと思います。

初めに、教育委員の皆様から御意見を頂戴したいと思います。その後、双方向の意見交換を行いたいと思いますが、本議題につきましては 11 時 50 分めどでございます。大変失礼でございますけれども、お一人 3 分程度で、まず一通り御発言いただいて、その後双方向で意見を深めていただきたいと思います。

では、教育委員の皆様はいかがでしょうか。

酒井代理者、いかがですか。

(酒井教育長職務代理者)

お願いします。AI 時代にあって、AI を規制する方向から共に学んでいく、共に生きていくというところにシフトしていく方向性をしっかり基本として持つこと、そうすると、今のお話にもあった五感を大事にした教育であるとか、あるいは安全性への目配りであるとか、そういうところをしっかりと考えていく必要が出てくると思いますので、規制をするというよりは、それをどう共に教育の中に位置づけるかということを大事にするというように思っております。

特に生成 AI の場合に、それを意思決定したり判断をしたりすることが大事になると。そうすると、先生にとっても、あるいは子どもたちにとっても、普段だったら考える必要もないことが、これは本当なんだろうとか、これをどう活用するといいのだろうかというようなところまでしっかりと考えながら学ばなければいけないということが起きてくると思うんです。

そういう意味では、先ほど武田教育長が言われたように、信州で培う教育観、どういう子どもたちを育てていくのかということとはしっかり持って、子どもたちが考えて自ら判断できるように、それは先生も同じだと思いますけれども、そういう意思決定ができるというようなところに責任を持っていくというような、そういう教育を可能にするような支えをしていく必要があるかと思います。

一方で、いろいろと保護者の不安の声を聞いています。規制すべきだというお考えの保護者の方、そういう地域の方のお話も伺ったりすることがあります。そのときに、生成 AI でまるきり学びを変えていくというよりは、それと同時に子どもたちの対人コミュニケーション、それから自然であったり、社会と関わったりというようなところ、先ほど知事もおっしゃったと思いますが、そういうところを大事にした上での AI の活用なんだというところを前面に押し出して、保護者とか地域の理解を得ていくというプロセスもとても大事になるかなというように思っています。

最後に、汎用的な AI の活用の場合には、ある程度のインフラというものを全体的に整えることは可能だと思うんですが、特定の目的の AI の活用、アプリ系ですね。こういうものは、やはり財政の問題が出てくると思いますので、接触できる機会に格差がないように心配りをしていくというのは、県としても大事なことなのではないかと思っています。

以上です。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

では、峯村委員、お願いいたします。

(峯村委員)

今までのお話をお聞きしている中でも、情報リテラシー、クリティカルシンキングというものを育んでいくことが大変重要だということは身に染みて分かっていますし、家庭の中を見ている、子どもたちが見ている動画が、本当にそれが正しいものなのかどうか、そういうところを育んでいく、どのようにそのクリティカルシンキングを育んでいくのかという学び方のノウハウみたいなものを構築していくことが急務なのではないかと考えます。

あまりにも自然に身近に入り込んできたものですから、抵抗感なく、自然にそばにいてくれる、何か相棒のようなそんな存在として子どもたちは認識しているようですが、ただしその相棒はうそをつく可能性があるのだということを前提で付き合っていかなければいけないというのは、今のうちに重々教えていかなければいけないと思うところです。

実験をしてみたんですが、家庭で子どもたちが見ている動画や画像というものが、これは AI がつくったものとそうでないものとどうやって判断をしているか聞きました。そうしたら子どもたちは、AI がつくったものは不自然だと言うんです。どの点が不自然なのかということを聞いたんですが、それを言語化できないんですね。どういうところを見て不自然だと思うのかということまで説明できて初めてその真偽を判断できるのではないかと思いますけれども、AI が作った動画とリアルのものと、どうやって判断したらいいかと AI に聞いてみたのですが、そうしたら、あまりにもきれいに整い過ぎている、例えば動物の毛並みがあまりにもそろい過ぎている、そういうところを見て、人間は不自然だと判断するようです。

そういうところも含めて、そうやって深掘りして、子どもたちが自分で、これは本物なのか、これは AI がつくったものなのか、自分から疑問に思っただけで判断するということの力をどのように育んでいけばいいのか、どちらかというと問題提起というか、疑問というか、そういうところを提起させていただきます。

以上です。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

では、藤原委員、お願いいたします。

(藤原委員)

よろしくお願いします。今年の夏、アメリカの東海岸に行ってまいりまして、ボストン教育委員会の指導主事との意見交換、ないしニューヨークのほうにも行って来たんですが、ニューヨーク市のほうは、報道にも出ていますとおり、中学生までの間は AI の使用を完全に停止する、1年間モラトリアムを設定しました。

ニューヨークのハーレムというすごく厳しい地域にいる高校、その校長だった先生とも話をしているんですが、彼が言うところでは、AI 使用が格差拡大の原因になっている

という考え方でした。よくアメリカだと、今、Kの字型と言われるんですけども、ある生徒に対しては AI というのは圧倒的に優位にする一方で、ある生徒に対しては全く無力化してしまう影響があると言われていました。

読解力であるとか、書く力、それから判断力、思考力、そういうものに対してまだ筋肉がきちんとできていない子どもに対して松葉づえを与えるようなものだと、その教師は言っていました。

一度その筋肉が育っていない子どもに対して松葉づえを与えてしまったら、その筋肉は永遠に培われないというので、それはマムダニ市長の考え方も重なる部分があるのかなと思っています。

ただ、アメリカでも自治体によって対応は様々で、ボストン教育委員会などは全面的にやめるという判断はしていなくて、どちらかというとガードレール型ですが、発達段階に応じてどの年齢のどの場面でどの学習目的で使うのか、どのような評価をしていくか、何が思考なのかという議論が進んでいます。

このように AI をめぐる教育の議論というのは、すごいスピードで変わっていると思います。これを読んできたんですが、OECD でも今年の夏に「AI Literacy Framework」というものが中等教育で出ています。これ自体はやりやすい、やっては駄目ですみたいなことは書いていなくて、やるかやらないのかどうするかみたいなことを考えるためのフレームワークだけ提示されています。

いずれにしても、この一日二日で、アンソロピックという会社が、フロンティア AI の開発スピードを下げないととても危ないという声明を出して、それに対してオープン AI のサム・アルトマン、イーロン・マスクまで、その開発スピードを落とさないと私たちは危ないと言っていることに対して、同調というか、それに対して賛同する声明を出したという状況になっています。

なので、この1～2年だけで議論がどんどん変わる現状の中で、どういうふうにやっていくかということはいずれにしてもすごく大変なことだと思いますが、特に教育格差に関わる部分であるとか、思考力を落とさないというとかという部分に関しては、ある種の慎重な対応は大事かなと思っています。

以上です。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

それでは、島委員、お願いいたします。

(島委員)

AI というのが学びに役立つという幻想の下に、何か議論されているような気がしてしようがありません。特に教師の使い勝手によって作業の効率化になるというのは、私も会社の中では AI をそういう形で使っていますので分かるんですけども、学びというところにフォーカスを当てたときに、本当に我々はちゃんと学びのプロセスを知っているんだろうかと。私は個人的に、まず情報というものが、どういうふうに学びに変わっていくのかというのは4段階あるというふうに考えていまして、まずは「知る」、その次が「分か

る」、その次に「学べる」、そして最後が「できる」です。

AI がどういうところで役に立つのかというところについては、まず第1段階目の「知る」というところについて、オープンデータをしっかり集めてきて、分かる形でまとめてくれますよと、第1段階目と第2段階目というところでその AI というのは発揮しますけれども、では、それは学びにつながるかというと、ダイレクトにはつながっていないと私は思っています。

映画も情報の一つですが、監督がこんな形で情報をまとめて、分かるという形になったからこそ感動を生んだりするんですね。ですから、人の情動が動く、感情が動くというところは、知る、分かるということでもまず完結できるものであって、ではそこから何を学ぶのかということについては、映画から何を学びましたかということと全く一緒の議論で、ここに自分なりのテーマがなければ、それをアウトプットできる再現性のある自分の血になり肉になる考え方に変化できません。

そこにおいて、一番重要だと私が思っているのは、リベラルアーツの部分だと思っています。例えばアリストテレスが三段論法というものを開発した上で、大前提、それから小前提、結論と。大前提として人間は必ず死ぬ、小前提としてここにいる島宏幸は人間である、結論として島宏幸は必ず死ぬと、これが科学の発達、それから人類の文明の発達に大きく影響してきたその推論の仕方、演繹的な推論の仕方であるわけですが、こういうことを理解して推論できるというところに、どう小中高校生を持っていけますかと。そこができて初めて、「知る」「分かる」から「学べる」になって、そこから「できる」がつながるんだろうと思っています。

あくまで道具でございますから、使い方を知らない人間が包丁を持ったら自分の指を落としたり、相手を傷つけたりするというリスクもあると、ではそれをちゃんとコントロールできる力というのは、これを学べるように人間側が工夫しなければいけないと思っています。

私からは以上です。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

それでは、伴委員いかがですか。

(伴委員)

AI や ICT 機器は本当に便利な素晴らしい力を持っていると思っています。ただ、私は子どもとメディア信州という団体で、子どもたちの使用状況について、長野県内の小中学生や高校生に 10 万人近いアンケートをさせていただいて 8 年が経ちましたが、子どもたちの ICT 利用の低年齢化、長時間化というのが進んでいまして、その使い方について憂うところもたくさんあります。

素晴らしい道具であるので、個別最適化がどんどん進みます。でも、個別最適化は孤立することではないと感じております。

今、教育委員会では「TOCO-TON (トコトン)」等の取組を通じて、多様な人々が直に関わりながら子どもの探究を進めるというような、そんな素敵な取組が進んでいます。さら

にこの「TOCO-TON（トコトン）」に磨きをかけて、直接の体験、人と関わる体験、人は信じてもいい存在なんだという体験をどんどんしてもらえるような、そういった長野県になることを期待しています。

阿部知事がおっしゃるように、長野県にはあふれるほどの自然、それから文化、こういったものを強みとして進めていかれるような、そしてその土台を持って AI を使いこなせるような人間が育っていくことを願っています。

以上です。

（小池県民文化部長）

ありがとうございました。

武田教育長、いかがでしょうか。

（武田教育長）

ありがとうございます。今のお話は、それぞれごもっともだと思ってお聞きしていたんですが、AI 時代ということだけではなくて、私は、今の「TOCO-TON（トコトン）」でもそうですが、変えていかなければいけない日本の教育の在り方というのがあって、それを長野県から変えていきたいと思っています。

そのことの一つに、結局学校の教育のほとんどは、子どもたちに失敗させないことをよしとするというか、子どもたちが失敗しないように先生たちが全部準備するみたいなことがずっと行われてきたのだけれども、実はこの時代になって、失敗することに意味があって、失敗したら修正していくということを学んでいかないと、この AI 時代の AI を子どもたちが使いこなせないのではないかと。

そうすると、失敗させない教育、正解主義といいますか、減点主義という、一番のそこに裏返ってくるのは評価のあり方ですが、できないことを何とかしようという評価のあり方から、できることをどんどん伸ばしていき、そのことをその子の力にしていくような教育にしていかななくてはいけないのではないかというふうに思っているんですけども、これがなかなか大変で、150 年以上染みついたものがどうやって変わっていくのかということもあるんですが、私が一番考えているのはそこです。

以上です。

（小池県民文化部長）

ありがとうございました。

知事、いかがですか。

（阿部知事）

そうですね。皆さんと同じような感覚で、そもそも AI 時代に AI をどこまで子どもたちの教育に取り入れていくのか、取り入れないのかというのは、まずしっかり考えなければいけないなと思っているのですが、先ほど AI 活用例で説明してもらった、これは文科省がガイドラインをつくっているんですね、一定の。文科省のガイドラインはどれぐらいの出来のよさか分からないんですが、出来はいいんですか。

そう聞いても答えられないかもしれませんが、出来がいいかどうかというのは、要するに現場の人たちが見て、これはなるほどそうだなとみんなが納得しているレベルなのか、取りあえず何か AI 時代だから作られたけれども、これを見ても何かよく分からないなという感覚のレベルなのか、私は見ていないのでよく分からないのですが、学校現場の人たちはどう受け止めているんですか。

(小池県民文化部長)

課長、いいですか。

(田中学びの改革支援課長)

国のガイドラインの出来について、具体的に申し上げるのは難しいのですが、県教育委員会としましては、国のガイドラインを基にしまして、長野県の学校における生成 AI の利活用ということで、昨年度、県独自にガイドラインを出させていただいております。その中では、今、ここでも議論いただきましたような対応を含めて盛り込んでおるところです。

(阿部知事)

今ここで出た意見は、制限をかけたり、むしろ AI が教育に活用されるよりは、ほかのことにもっと力点を置くべきではないかという意見がいっぱい出ていますが、教育委員会ではそれは議論していますか。

(武田教育長)

先ほど話があったように、やはり長野県の子どもたちが都会の子どもたちと同じ教育をしても意味がないから、長野県の強みは何かというと、やはり自然が豊かだったり、社会にいろいろな資源があったり、それを特に小学校低学年のうちからしっかり体験するということは、長野県の教育の基盤にしようということは議論しています。

(阿部知事)

私は、まず、県としてのルール化なり考え方なりをしっかりと検討して、現場の教員の意見も聞きながら、またもっと飛び抜けた、AI が今後どうなっていくかという、ある意味技術者だけではなくて哲学者みたいな方たちの意見も聞きながら考えていかなければいけないぐらいの、相当重要な、重要なというのは、たぶんこれからの教育がどうあるべきかということの根幹に関わってくる話なので、ガイドラインは教育委員会では検討していますか。

(武田教育長)

次に第 5 次の教育振興基本計画があるので、その議論について始めているところです。

(阿部知事)

まず、私学教育にも関わるので、まず総合教育会議の場でちゃんと議論したほうがいい

のではないかと思っているのですが。

子どもたちを AI であったり、デジタル社会の中で、どこまで子どもの段階で適合していくのか、あるいはどういう状況であつたらむしろ切り離していくのか、かなり難しい話だと思うのですが、誰かが意思決定をしていかないと誰も決めない。国レベルでもう少し踏み込んでもらったほうがいいところもあるとは思いますが、私は教育の問題はいつも国に決めてちょうだいというのはあまりよくないと思っていて、世界の最先端の知見も取り入れながら、長野県として、信州の子どもたちをどうやって育てていくのかという、極めて核心的な部分なので、そこはぜひ皆さんと一緒に考えていくことが必要だと思いますので、考えていく上での視点を、今日皆さんと出し合うのが生産的なのかなと。今日言って終わりという話だと子どもたちにとってプラスにならないので、そういうものを県として策定するという前提に立って意見を出し合ったほうが生産性が高いと思うのですが、そういう感覚で、教育長とか教育委員会、事務局はいいですか。

(武田教育長)

お願いします。

(阿部知事)

そうしたときに、皆さんからもかなりいろいろ御意見が出ていたので、重なる部分もありますが、何点か私が感じていることを申し上げると、酒井委員がおっしゃったように、AI や SNS に対する社会の受け止め方というのは、まだ過渡期で、大きく変化している中で、たぶん教育委員会なり県としてこういう方針で定めますよということも、たぶん数年たったら見直さなければいけなくなると思いますし、おそらくそれ以上に、保護者の皆さんがどういうものなら納得して受け入れられるのかということをやちゃんと対話していくことが必要ではないかとすごく思っています。

ただ、いろいろな人の持っている知見はばらばらなので、教育委員会や我々がある意味もっと AI 社会のあり方について学びを深めて方向感をお話しできるようにしていかないと、たぶん基本的なところで、まず壁にぶち当たってしまうのかなという感じがするので、そういう意味で、もっと私たち自身が、今日も杉浦さんから御講演いただきましたけれども、このことについて学びを深めていくことが必要ではないかと思います。

それから、峯村委員からクリティカルシンキング、情報リテラシーの話がありましたけれども、これは子どもだけではなくて、実は大人についても考えていかなければいけない課題だと思います。昨日も沖縄県知事選挙がありましたが、昨今の選挙は、都道府県知事選挙も、ほかの都道府県から発信されたような SNS でだいたい誹謗中傷等、根拠のないデマが飛び交ってしまうと。これは本当に民主主義社会にとっては極めて危険な状況だと思います。

これは単に子どもたちが正しい判断をする、子どもたちのためということにとどまらず、私たちの社会の基盤が、実は新しい社会の変化で揺らいできているという感覚をぜひ共有していただいて、しっかり考えていくべき問題だと思います。

それから、私は昨日と一昨日、ある集まりがあつて京都に行っていて、観光について語れということで観光政策について少し話をしてきたんですが、京都の松井市長が来て、京都

基本構想を PR されていましたが。この基本構想は、最近よくありがちな計画とは違って、構想ですので数値目標も何も書いていないと。全部文言で書いてあるんですが、京都はこういう町だと、どういう価値を大事にしているかと、そういうことが記載されています。

松井市長が語っていた中では、世の中が変わっていくことに合わせてどんどん変わる、そうしたことの重要性を話されていらっしゃいましたが、私たちがこれからの社会を担う子どもたちに期待をしなければいけないのは、教えられたことを粛々と実行するというようなモデルとは全く違う人づくりをしていかなければいけないだろうと強く思っています。

そして、かつ、今、お話をしたように、一人一人の子どもたちの能力が違う、個性が違う、そうしたこと自体が当たり前で、それを社会全体がしっかり受け入れる、評価する、そうした形に変えていかないと、ただ学校の成績がちょっといいぐらいで勉強ができる子みたいな発想には、たぶん AI 時代には全くならないだろうと私は思います。

そういう意味で、武田教育長がおっしゃっていたような学校における評価のあり方を抜本的に変えないと、もう完全に 20 世紀モデルの評価をしていると私は思っていますので、そういうところも、ぜひ教育委員会の皆さんと一緒に変えていきたいと思っています。

それぞれの委員の皆様がおっしゃったことは、私も全くそのとおりでと思っています。藤原委員がおっしゃっていた格差を広げない、思考力を落とさないということはすごく大事なことだと思いますし、また、島委員、伴委員がおっしゃいましたが、人間しか感動しないので、知識以上にどういうものに感動して、そうしたものをこれからもっと広げられるような人間をどうつくっていくのか。ものごとに感動しない人間であってはいけないなと。

ちなみに先ほどの話で、観光のセッションで対話したのは、脳科学者の人がいたので、どういう観光地が印象に残るんですかという質問をさせていただきましたが、自分の人生観が変わるような体験、ある意味感動に近いと思いますが、そういうところは記憶に残る、また行ってみたいと思うと。やはり子どものうちからそうした感動するような体験を重ねるような機会を子どもたちにつくってあげなければ、おそらく人間としての基本的な能力が、AI 時代にどんどん低下してしまうのではないかと思いますので、そういう意味で、学校教育段階において、子どもたちに私たちが提供しなければいけない価値は何かということも、もう一回この AI 時代においては考え直す必要があるのかなと思っています。

だいぶ長く話しましたが、いずれにしても、先ほどのうちの県の説明では、授業利用している学校とか、放課後に利用している学校がまだ少ないというのは、ある意味今から革新に近い状況でやれるという可能性でもあると思いますので、ぜひ皆さんと問題意識を共有しながら、より踏み込んだ学びの改革、あるいはこれは社会の皆様の理解と協力を得ながら、どういう活用の仕方、あるいは場合によったら規制やルールをつくっていくということも一緒に考えていきたいと思っています。

以上です。

(小池県民文化部長)

双方向の意見交換をしたいと申し上げたのですが、大幅に時間を超過してしまいました。申し訳ありません。

いったんここで区切らせていただいて、最後にまとめてまたお話をいただければと思います。

5 その他（報告事項）

業務量管理・健康確保措置実施計画の策定報告

（小池県民文化部長）

報告事項がございます。そちらの報告を先にさせていただきます。

業務量管理・健康確保措置実施計画の策定報告につきまして、教育委員会から説明をお願いいたします。

（柳沢高校教育課長）

よろしくお願いいたします。長野県立学校の教育職員に関わる業務量管理・健康確保措置実施計画につきまして、資料3を御覧ください。

こちらの計画は、公立の義務教育諸学校等の教育職員の給料等に関する特別措置法第8条に基づき策定いたしました。

2の「計画の概要」を御覧ください。こちらの計画は、教職員が存分に子どもと向き合える時間的余裕や精神的ゆとりを確保するため必要な業務量管理・健康確保措置について、県教育委員会と県立学校が取り組むべき事項をまとめたものでございます。

学校における働き方改革推進のための方策及び第4次長野県教育振興基本計画における教職員自身のウェルビーイング向上のための働き方改革を実行するための行動計画としても位置づけてございます。

実施計画の期間でございますが、令和8年度から令和11年度までの4年間としまして、最初は県立高等学校及び県立特別支援学校、県立附属中学校でございます。

5の「計画に定める目標」を御覧ください。まず一つ目、時間外在校等時間につきましては、1年間の1か月平均当たり30時間程度を削減するとします。また、第2にワーク・ライフ・バランスに関する目標として、年次有給休暇の年間平均取得率を15日以上とすること、さらに男性の育児参画に関する休暇の取得率を、100%を目指していきたいと思っております。

今後につきましては、毎年度計画の実施状況や目標達成状況をホームページ等で公表してまいります。

以上、概要でございます。説明は以上です。

（小池県民文化部長）

この点は報告ということでよろしいですね。ありがとうございました。どうぞ。

（阿部知事）

これは30時間程度に削減とか、年休の平均取得日数15日以上とか、現状や他の都道府県と比べて、高い目標なのか、当たり前の目標なのか、低い目標なのかは全く分からない

のですが、どういう感覚で受け止めればいいですか。

(柳沢高校教育課長)

まず、現在の状況でございますが、こちらの計画の1ページの下に令和6年度のそれぞれの時間外在校等時間の高校と特別支援学校の数字がございます。令和6年度、37.27時間が高等学校、特別支援学校 32.28 時間で行いました。昨年度、高等学校のほうで35.98 時間、特別支援学校が 28.20 時間ということでございます。少しずつ少なくなっているという現状がございます。

他県と比べてはございませんが、まず目標値として全国的に 30 時間を切るようにということが目標でございますので、こちらを目指しています。

ただ、現状高等学校のほうは、特別支援学校に比べますと部活動や教材研究等も含めまして、長時間労働をしていらっしゃる方もいらっしゃるということもありますので、これについて、さらに時間が少なくなるように各学校に働きかけてまいりたいと思っていますところでございます。

(阿部知事)

報告事項なので私があまりしつこく質問してはいけないだろうと思っていますが、重要な話なのであえてですが、これは、目標年次は4年間でここまで達するということですか。

(柳沢高校教育課長)

さようです。

(阿部知事)

4年間あったらこうしようということだと、ちょっとずつの改善しか皆さん着手しないで、抜本的に何をやるかというところに思考が行かない気がしているんですけども、この実現するための最もキーとなる取組は何ですか。

(柳沢高校教育課長)

やはり先生方の意識の改革という部分もあるかと思いますが、それと同時に、先ほど来出ております教員の働き方の支援に関してどのようにするか。部活動についてもそうですし、教材研究やその他保護者の対応等も含めて、支援のあり方について考えていければと思っています。

(武田教育長)

高等学校は部活です。中学校は地域展開をしているので、ある程度あれですが、高等学校については、部活は今もって教員がやっているもので、ここが一番大きな問題です。

(阿部知事)

そうですね。先ほどの学校のガバナンスの話を公約に掲げたという話をしましたが、教育委員の皆さんと共有したい問題意識は、結構学校が頑張って自主的に取り組みなさいと

ということが結構多いんですが、もっとルール化してこうしてくださいというふうにやることは、もっとしっかりやっていかなければいけない部分があるのではないかとということと、学校においてのこういうものを受けたときの対応が、誰が責任とリーダーシップを持って取り組むのかということを確認しておかないと、おそらくたくさん教育委員会や文科省から通知が出ているので、そういう中に紛れ込んでしまうのではないかと問題意識を持っています。

これは誰がこの問題にしっかりコミットして、普通だと校長や教頭がやってくださいという話になると思いますが、たぶん校長とか教頭はいろいろなことをやらなければいけないことになっているはずなので、学校のガバナンスで、もっと地域の人たちや保護者の皆さんの理解も得ながら、こうしたことをどう取り組むべきなのかということまで、ぜひ教育委員会全体で踏み込んで取り組んでいていただければありがたいと思います。

いっぱい質問して申し訳ないんですが、学校との間の取り方という意味で、もう少し踏み込むべきところは踏み込むし、踏み込まないで学校に任せるところも学校においてはちゃんと誰が責任を持って取り組むのか、保護者とか県民に対して誰が説明責任を果たすのか、そういうところをしっかりと明確にしていっていただきたいと思うので、ぜひよろしくお願いいたします。

(小池県民文化部長)

時間になってしましまして申し訳ございません。本来でしたら委員の皆様からも、例えば知事に対してであったり、双方向の質問・意見などのやり取りがあってしかるべきだと思いますが、今後の予定もありますので、申し訳ありません。

(阿部知事)

私は大丈夫です。委員の皆様が大丈夫なら。

(小池県民文化部長)

よろしいでしょうか。特にぜひというのがあれば、知事は時間が大丈夫だそうですので。いずれにしても、皆様方から、今後県として AI 時代にどういう教育をしていくかという核心の部分でありますので、それぞれの委員からの視点はいただいたと思っておりますので、今後また総合教育会議などでも議論していくということでございます。ありがとうございました。

6 まとめ

(小池県民文化部長)

では、最後に教育長、知事の順で、それぞれまとめを一言ずついただければと思います。よろしくお願いいたします。

(武田教育長)

ありがとうございました。いろいろな点から御意見をいただいて、これから生かしていきたいと思いますが、学校教育について考えるときには、やはり一番は子どもにとってどうかという、この線は外してはいけないと思いますので、子どもにとって、子どもからという視点を失わずにいきたいなと思います。

例えば、AI の規制をするのは大人からはあり得ることだと思いますが、現実には今、ネットでしかつながれない子どももいるわけで、そういったことも含めた議論をしていかないといけないのだろうと思っています。今後教育委員会の中でもこの議論を深めてまいりたいと思います。ありがとうございました。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

では、知事をお願いします。

(阿部知事)

どうもありがとうございました。この AI という切り口ですが、先ほど申し上げたように、社会ががらっと変わろうとしている中で、子どもたちにどういう教育を提供するかという極めて根源的な問いを突きつけられている状況ではないかと思っています。

私は教育委員の皆様とは同じ行政の執行機関でありますので、私は選挙で選ばれている立場ですのでかなり勝手な言いたいことを言わせていただいています。一方で、教育委員の皆様も、ぜひどんどん思い切った発言をしていただいて、社会をしっかりと変えていく上で行動していってほしいと強く願っています。

何しろ学校教育のところは私の権限からはかなり離れてしまっているので、私がこうしたいということだけではほかの分野と違って動きませんし、何よりも、学校現場の先生方やあるいは市町村の教育委員会の皆さんや、そうした皆さんの理解や協力、こうしたものが不可欠であります。

そのためには、やはり明確なメッセージ、明確な方向感を共有しないと、このメンバーでは今も感覚は共有されつつある感覚を私はしていますが、ただ学校現場の皆さんとどこまで共有できているかというと、まだそういうレベルには全く至っていないのではないかと思います。

そういうことを考えると、この総合教育会議においては、単に勉強してよかったというレベルでは絶対いけないと思っています。もう少しここでこういう方針で取り組んでいきたいとか、こういうメッセージを学校現場に出していきたいとか、そうした具体的な形のアクションにつなげていかないと、学校現場との距離感も縮まないし、実際の学びの変革も行われなと思っていますので、そういう感覚で、先ほど申し上げたように、私の公約についても、ぜひ皆さんとディスカッションしながら方向感を共有していきたいと思っていますが、極めて教育の部分は変えていくことが難しい部分もありますし、また一方で、変えてはいけないこともあるので、そういう意味では、私は少なくともこの場では曖昧さがないといいと思っています。何となくこうだったねということだと、例えば私がどこかに行ったときに、総合教育会議ではこういう方向でやりますということ、自信を持って発言できません。そういう意味では、時間がまだ大丈夫ですよと申し上げたのは、何と

なくまとめをしっかりとしないまま終わってしまうのはよくないなと思っています。

ですから、私としては、先ほど提案させていただいたように、本県がつくっているガイドライン、名前がよく分かりませんが、これをちゃんと教育委員の皆様と我々で、今の社会の動きを踏まえてしっかりと現場の皆さんの意見も聞きながらいいものを作っていくという方向性で取り組むということで今日はいいいですか。そういう感覚で取りまとめてしまっているのかどうか分かりませんが、それでいいですか。これは相当根源的な問いが入っているので、何となく、今日はありがとうございましたという取りまとめをするのはよくないと思っているので、そういうことでいいですか。

(一同)

はい。

(阿部知事)

では、そういうことで、また次回以降もこうしたテーマをしっかりと皆さんと共有しながら、新しい時代に即した長野県の学びのあり方を考え続けていきたいと思いますので、私もまた勉強していきますので、ぜひ皆さんもそれぞれ知見を膨らませていただき、必要であれば有識者の方もお招きして、しっかりと深めていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

(小池県民文化部長)

ありがとうございました。

7 閉 会

(小池県民文化部長)

本日予定しておりました会議事項は以上でございます。これにて閉会いたします。

本日は、お忙しいところ御参加いただきましてありがとうございました。

(了)